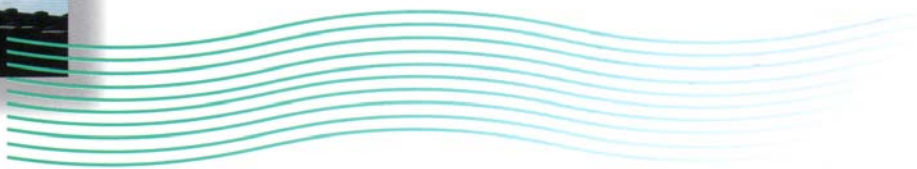
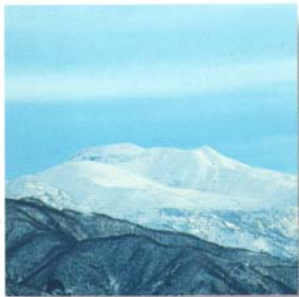


いしかわの
夏の
祭り





あいさつ

これまでわたしたちは、身の回りの音を時として騒音としてとらえ、遠ざけることに努めてきましたが、近年、音のある風景というものが見直され、生活の場にふさわしい、好ましい音を積極的に評価し、音の聞こえる環境を大切にして行こうという機運が高まってきました。

平成8年6月に環境庁が「日本の音風景100選」を認定したのも、このような考え方を反映したものです。

本県においても、平成8年度に、県民の方々から地域における音風景の中で、後世に残して行きたいという音を「ふるさとの音」として募集したところ、延べ427件、325種類もの御応募を頂きました。

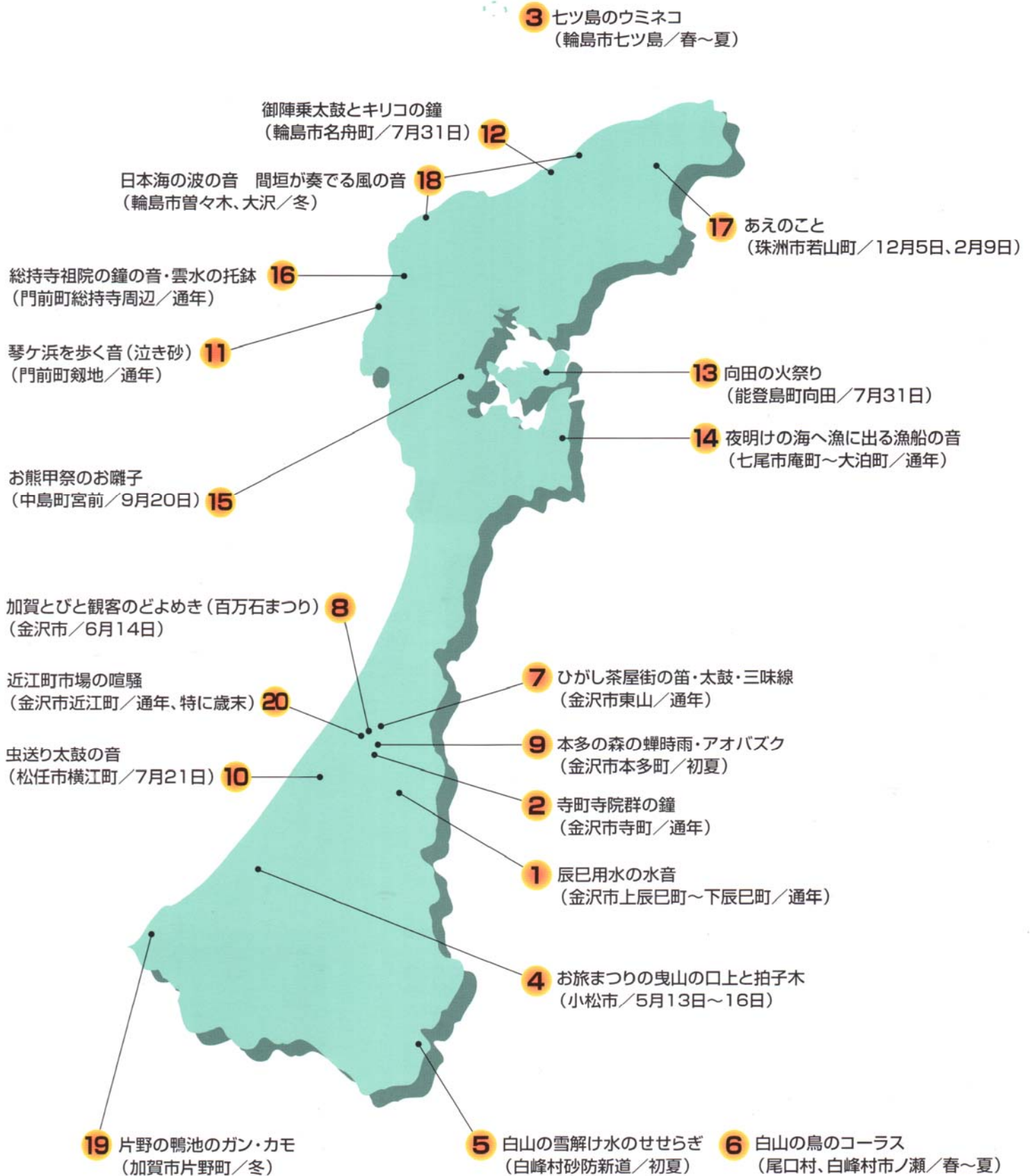
本書は、これらの中から「ふるさとの音選定委員会」が選定した石川県らしい20種類の音をCD付き解説書『いしかわの音紀行』としてとりまとめたものです。

本書を通じて、県民の皆様が、日常生活の中の様々な音の再発見や良好な音環境の保全について心にとめていただければ幸いに存じます。

平成10年3月

石川県知事 谷本 正憲

いしかわの音紀行 一覧



一 辰巳用水の水音



「城下町の風情が色濃く残る金沢市は、浅野川と犀川、そして多くの用水がかげめぐる水の街でもあります。中でも辰巳用水は我が国有数の用水で、1632年完成。今もその隧道を水は流れます。」

かいせつ

金沢は市内を流れる浅野川・犀川の2河川に加え、用水が街中を縦横にかけめぐる水の町です。数多い用水の中でも辰巳用水は、玉川上水、箱根用水、五郎兵衛用水と並び日本有数の用水です。この用水は寛永8年(1631年)に城下を焼き尽くした大火を契機に工事が始まり、隧道(トンネル)や逆サイホンを使う当時の最先端技術を駆使してほぼ1年足らずで完成したと伝えられています。城を取巻く堀に水を満たし、防備の強化を担っていた点が大きな特徴です。現在も、金沢城址の東側にあたる兼六園へは地下管を通して辰巳用水が導水されています。水路を守るため、修理や取替えを行なう「江ざらい」や、雑草を刈取り水の通りを維持する「江の掃除」など、地域ごとに多くの人々が用水を守る努力を続けています。また平成5年(1993年)には、金沢市大森町から錦町にかけて「辰巳用水遊歩道」も完成し、せせらぎを聞きながら、用水沿いを散策できるようになりました。



二 寺町寺院群の鐘



「金沢市寺町には、大小合わせて70あまりのお寺があり、400年の歳月を経て、今もなお落ち着いた町並みを残しています。長い一日も終わり、寺町通りの車の流れもひととき途絶えるころ、鐘の音が町に響きわたります。」



かいせつ



金沢市内の南方、犀川沿いに位置する寺町は、その名の通り70あまりの寺院が立ち並び、情緒あるたたずまいを残しています。藩政時代、加賀藩三代藩主前田利常の命により金沢市内に点在していた寺院は寺町と卯辰山の2か所に集められました。その目的は攻め込む敵に対して、寺院群に要塞の役目をさせることにあったと言われていました。寺町の寺院群には、文豪室生犀星が幼年時代を過ごした雨宝院や広い禅庭を持つ竜淵寺、忍者寺として有名な妙立寺など特徴のある寺が多くあります。しかし、第2次世界大戦で鐘などの金属類を軍に提供したことや、戦後の生活様式の変化などにより、現在、朝夕定時(午前・午後5時)に鐘をついている寺はそう多くありませんが、住民の手で毎週土曜日の夕方6時と大晦日に鐘がつかれている寺もあり、少しずつその数も増えてきています。寺町に鳴り響く鐘の音は、町の生活音と重なり日常生活と一体となった音色と言えるでしょう。なお、この音は環境庁の「日本の音風景100選」に認定されています。

三 七ツ島のウミネコ



ウミネコとそのヒナ

「^{わじま}輪島市の北、およそ20キロにある7つの無人島。そこはウミネコなど海鳥の楽園です。その数は、数万羽。島全体が^{せつしま}国設鳥獣保護区に指定され、全国でも数少ない、海鳥たちの集団繁殖地になっています。」

かいせつ

^{わじま}輪島市の北約20kmに位置する7つの無人島の一群を七ツ島と呼びます。島の周囲は、日本海の荒波による激しい侵食で断崖を成しています。地上からの捕食者が近付けない安全な場所である七ツ島は、ウミネコやオオミズナギドリ、カムムリウミスズメなど海鳥の楽園です。島全体が^{せつしま}国設鳥獣保護区に指定され全国でも数少ない、海鳥たちの集団繁殖地になっています。ウミネコは、尾の黒帯と「ミャーオ、ミャーオ」という猫に似た声の特徴で、漁港周辺や海岸線で最も普通に見られるカモメ科の鳥です。七ツ島では、大島や御厨島等の草つきの岩場で1万羽以上のウミネコが集団で繁殖し、毎年春から夏にかけて、ウミネコたちの賑やかな声が響き渡ります。



四 お旅まつりの曳山の口上と拍子木



「風薫る五月。新緑の訪れと共に、毎年小松市では『お旅まつり』が行われます。曳山の子供歌舞伎。その豪華絢爛な歌舞伎の一幕一幕が、見る人を圧倒し、子供達の堂々とした熱演が感動を呼びます。」



かいせつ



お旅まつりは小松市にある本折日吉神社と菟橋神社の春祭りです。毎年5月13日～16日まで開催され、両社の神輿が町内を渡御(旅する)することからその名が付けました。祭りの始まりは江戸時代初期とされていますが、町の人たちがあちこちの祭を見物し、今までにない立派な物を造ろうと曳山を10基建造し、江戸時代中期頃から子供歌舞伎が演じられるようになりました。当時、地元の職人が意匠を凝らして作った曳山は8基が現存し、絢爛豪華な曳山を舞台として数人の少女を中心に、子供歌舞伎が演じられます。祭り一番の見どころである子供歌舞伎は、若連中と呼ばれる青年たちによる勢いのある口上と拍子木によって幕開けが告げられ、大人顔負けの艶っぽい熱演に、毎年街角を埋め尽くした見物客からの喝采が集まります。芝居は期間中10数回上演され、地元の人たちによる浄瑠璃(義太夫)・三味線の音の小松の町を包み込みこむことでしょう。

五 白山の雪解け水のせせらぎ



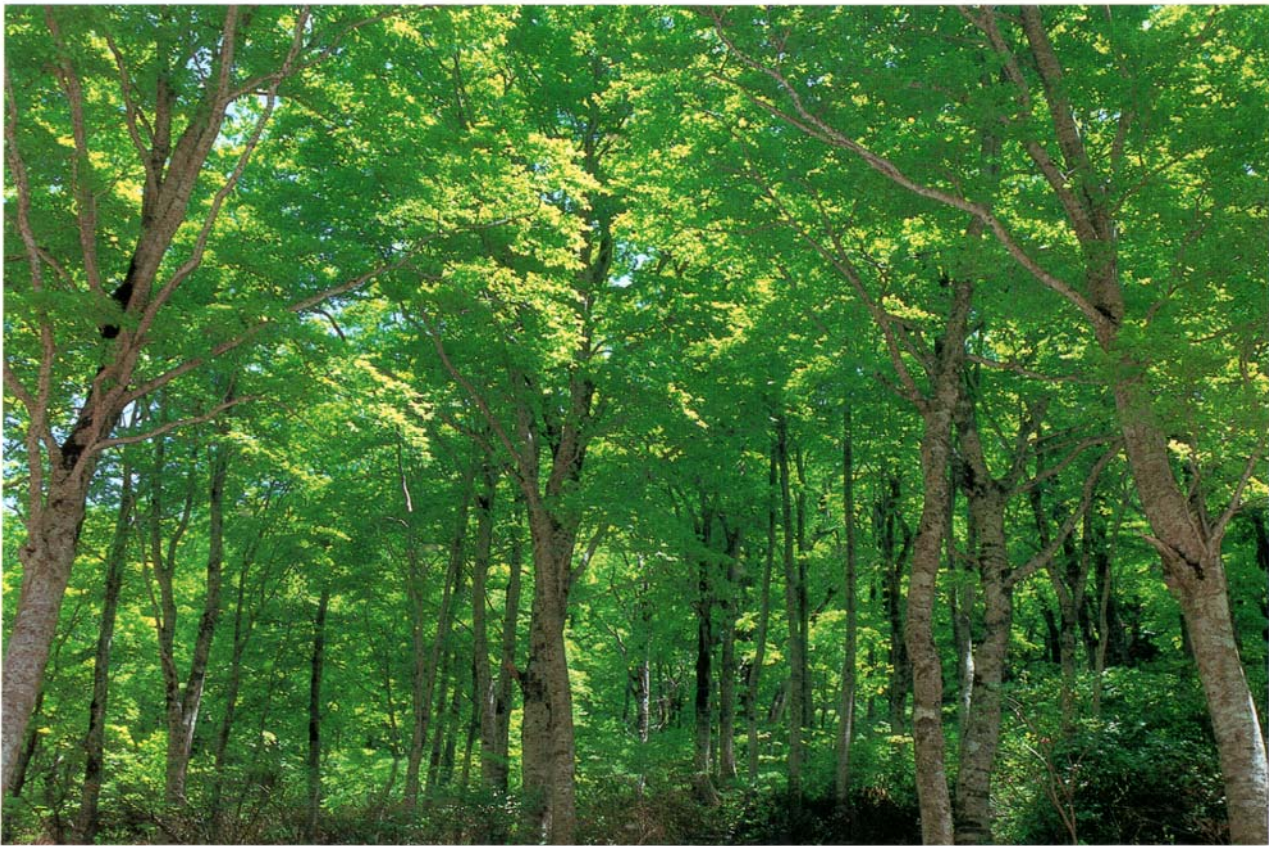
「霊峰白山。冷たく透き通る雪解け水が、初夏の訪れを告げます。」

かいせつ

白い雪におおわれた白山は、その神々しい姿から御神体山として崇められ、人々の信仰の対象となってきました。富士山、立山とともに日本三名山と称されています。白山山系の雪解け水は、手取川・庄川・九頭竜川などの河川の源流となっています。石川県で最大の河川「手取川」は、御前峰山頂あたりの雪渓から流れ出る水を最初の1滴とします。雪解け水を集め、山の奥深くをとうとうと流れる渓流は、清らかな水音を発し、厳しい季節を耐えてきた木々や草花や、カモシカをはじめとする多くの生きものたちの命の水となります。また、この水は巨大な手取川ダムを満たし、人々の生活を支えます。中流部の手取峡谷をへて、穀倉地帯である手取川扇状地を潤し、長い旅を終えて日本海へと流れ着きます。



六 白山の鳥のコーラス



「春から夏にかけて、白山では、ヒガラ、キビタキ、イワヒバリなど、多くの野鳥たちが一斉に繁殖します。鳥たちのさわやかな歌声は、聞く人の心をいやしてくれます。」



イワヒバリ

かいせつ



自然の宝庫「白山国立公園」。中でも、ブナ、ミズナラなどに代表される樹海の美しさはすばらしいものです。春から夏にかけて、この白山の豊かな森で多くの鳥たちが新しい命を育みます。山麓部ではホオジロ、カケス、ウグイスなどが多く、ヤマセミ、アカショウビン、ノジコなども繁殖しています。中腹のブナ林にはヒガラ、コガラ、キビタキ、コルリなどが見られ、亜高山帯ではメボソムシクイ、ウソ、ルリビタキの姿が確認できます。さらに、高山帯に目を向けるとイワヒバリ、カヤクグリ、ホシガラスに出会えます。これら白山に暮らす鳥たちは、登山道を行く人の耳にさわやかなコーラスを聞かせてくれます。秋になると、白山麓にはツグミ、アトリ、マヒワなどが渡ってきます。ゴジュウカラ、コガラ、アカゲラなどは冬でもブナ林に生息しています。また、石川県のシンボルにもなっているイヌワシが上空を飛んでいる姿も見ることができます。

七

ひがし茶屋街の笛・太鼓・三味線



「金沢市、ひがし茶屋街。紅殻格子の家々が軒をつらね、ときおり三味線や小唄の粋な調べが格子の間から聞こえてきます。百万石祭りが近づく頃、総稽古の調べはいっそう華やかに...。」

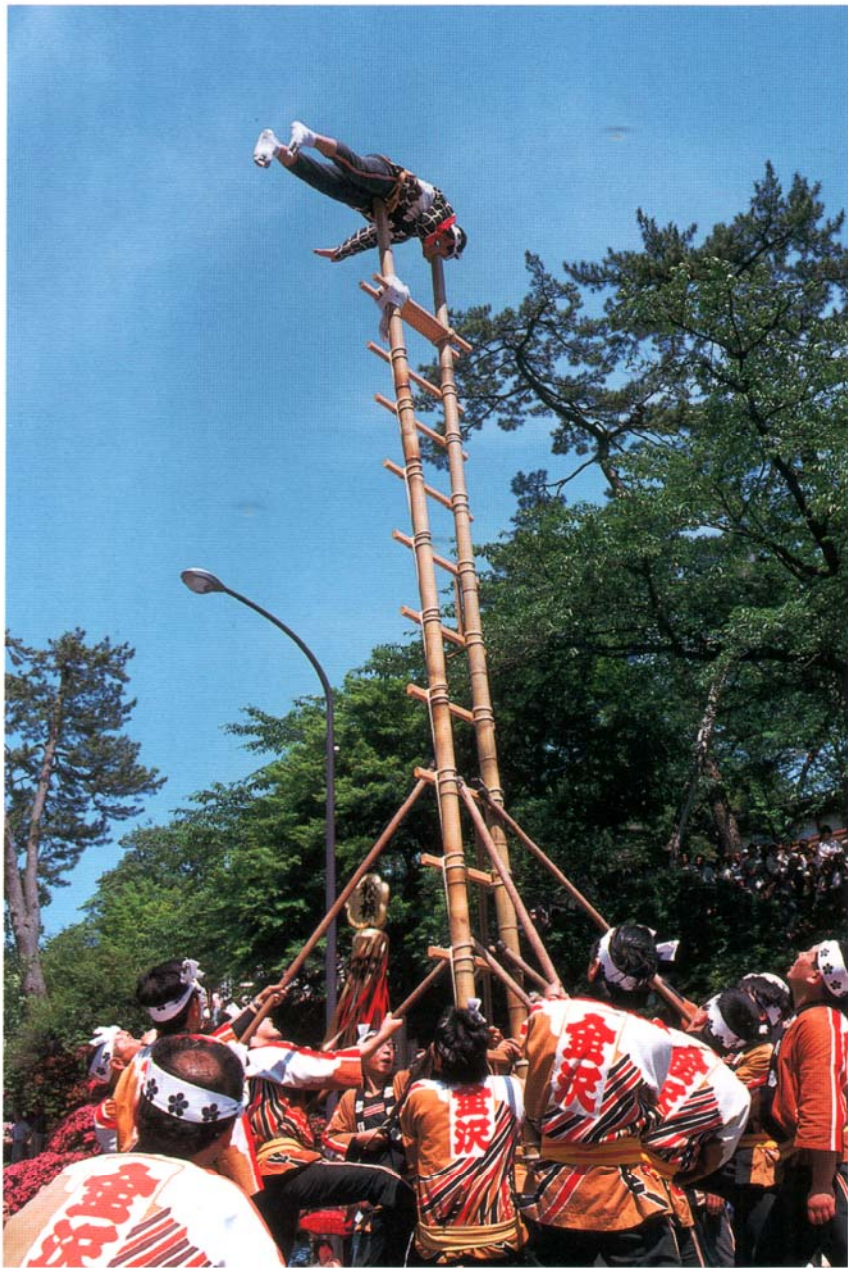
かいせつ

金沢市北部を流れる浅野川の右岸に「ひがし茶屋街」があります。石畳の道の両側には、紅殻格子が軒を連ね、昔の茶屋街の面影を色濃く残しています。ひがし茶屋街の歴史は古く、藩の政策によってお茶屋を集めて町割りし、現在地に落ち着いたのは文政3年(1820年)にさかのぼります。それだけに格式も高く、一見の客は断るしきたりは今も変わっていません。茶屋街の風景は「町並み保存」の文化財として保護され、そこだけタイムスリップしたかのような雰囲気を感じさせています。あたり一帯は、日中は閑散とした様相ですが、夕暮時ともなるとにわかに華やいてきます。軒灯がともる通りを芸妓さんたちが行き来し、どこからともなくかすかな三味線や太鼓・笛、小唄の粋な調べが聞こえてきます。



八

加賀とびと観客のどよめき(百万石まつり)



「加賀藩初代藩主・前田利家の金沢城入城を再現した百万石行列。その豪華絢爛の時代絵巻に、街頭に並んだおよそ50万人もの観客が、大きな拍手を送ります。百万石まつりは金沢の行事の中でもひととき華やかなものの一つ。」

かいせつ



加賀とびとは、江戸の町を火災から守るためにつくられた加賀藩雇用大名火消しのことを言います。享保2年(1717年)、將軍徳川吉宗が、蒲郡付近の火災時の防火を各藩に命じたことから誕生しました。当時の加賀藩は、江戸大名火消しの中でも勇猛果敢な行動と華麗な装備で知られ、江戸町人の語り草になるほどでした。その心意気を受け継いでいるのが加賀藩の梯子登りです。起源は定かではありませんが、当時の火災現場で重宝した梯子の上で、身軽な動作と熟練の技を要求されたことにあるのでしょう。梯子登りの伝統は勇ましさの象徴でもあり、出初式や藩主前田利家の金沢入城を再現して6月14日に行なわれる「百万石まつり」で勇壮華麗な妙技を多くの観客に披露しています。特に、百万石まつりでの勇姿は、浮世絵や錦絵にも描かれた加賀藩行列を彷彿させ、見事な技の数々に沿道の観客からは、称賛のどよめきと惜しめない拍手が起こります。

九

本多の森の蟬時雨・アオバズク



アオバズク

「賑わう町の中にも、ゆっくりと時が流れる場所があります。ここは、金沢市本多町。加賀藩・筆頭家老だった本多家の敷地内。日が沈むと、アオバズクの鳴く声が、遠くで聞こえます。」

かいせつ

金沢市の中心部には、加賀藩の筆頭家老を務めた本多家の屋敷があり、その背後はうっそうとした森におおわれていたので、「本多の森」と呼ばれるようになりました。現在は、美術館などの文化施設が多く、藩政期からの樹木と新たな植栽が、緑濃い文化ゾーンを形成しています。本多の森には多くの野鳥が生息しており、フクロウの一種で、深緑の頃飛来するアオバズクもそのひとつです。この鳥は、ハト程度の大きさで夕刻から夜間にかけて活動し、昆虫類を主食にしています。その名前は、青葉の頃鳴き始めることからきており、「ホッポー、ホッポー」と2声づつ繰り返して鳴く声があたりにこだまします。また、緑豊かな木々はセミにとっても格好の棲み家を提供しています。初夏になると、朝夕はヒグラシが、日中はニイニイゼミの「チー」と鳴く声やアブラゼミ・ツクツクボウシがその短い命を精一杯謳歌するように鳴き、行き交う人々に夏の訪れを感じさせてくれます。本多の森の蟬時雨は環境庁の「日本の音風景100選」に認定されています。



十 虫送り太鼓の音



「豊作を祈願して行われる松任市横江町の虫送り。たいまつたいまつの火の粉ほのこなを浴びながら叩く太鼓たいこの音が、赤く染まる夜空に響きます。」



かいせつ



虫送りは、害虫追放を願って農村で古くより行なわれてきた民俗行事です。昭和の初め頃までは各地でよく見られましたが、戦後、次第に影をひそめました。このような中、今でも大規模に虫送りを行っているのが、松任市横江町です。虫送りは、毎年7月21日の夜と決まっており、住民や近隣の市町村から多くの人たちが参加します。祭りの準備は1ヵ月前に青年会による太鼓のバチ作りから始まります。バチには柳の枝が使われ、アクを抜き、しなりを出すために水に浸けられます。その間、「虫送り」の文字が入った巨大な火縄アーチ作り、太鼓の練習などが行なわれ、祭りを迎えます。当日は、太鼓を先頭に、暗闇の中を松明・カンテラを手にした人々が宇佐八幡神社へ向かい、火縄アーチの下をくぐると一気に境内に入り、大かがり火を囲みます。そして火の粉を浴びながら狂ったように打ち鳴らされる太鼓の競演が始まります。太鼓がうまく叩けて一人前の男と認められてきたため、虫送りは青年たちにとっての晴舞台でもあります。

十一

琴ヶ浜を歩く音(泣き砂)



「能登、門前町、琴ヶ浜。この浜に残る悲恋の伝説。ヒロインおさよのすすり泣きのように砂が鳴るところから、泣き砂と呼ばれています。」

かいせつ

門前町の西南部にある長さ約1,500m、幅約40mの美しい砂浜——琴ヶ浜。この海岸の乾いた部分をすり足で歩くと、キュッキュッという摩擦音が聞こえてきます。これはガラスや陶磁器の材料でもある石英という粒子が多く含まれているため、琴ヶ浜に流れ出る仁岸川上流からきた石英が、日本海の荒波に洗われて堆積したものです。琴ヶ浜には、砂の鳴る音にちなんだ悲恋伝説も伝わります。「おさよの婿どの重蔵は、輪島、舳倉島間をゆきかいたる渡しの船頭を生業としていたが、ある日の時化で愛する夫はついに帰らなかった。それでも夫の生存を信じるおさよは、毎日、夫の船出を見送った琴ヶ浜の磯に立って、船の帰るのを待った。おさよの涙は白砂の浜にしみこんでいったが、待ちを待つ夫はついに帰らぬ人となった。おさよの死後幾日もたったある日、浜べの人が砂の上を歩くとそのたびに、足もとの砂がかすかに鳴るのに気がついた。それ以来このあたりの浜を「泣き砂の浜」と呼ぶようになった。」



御陣乗太鼓とキリコの鐘



「輪島市名舟。波の音と、御陣乗太鼓の壮大な響き。情熱。燃える想い。狂乱の連打が海に空に広がります。」

かいせつ



輪島市名舟御陣乗太鼓は、7月31日から8月1日にかけて名舟町の氏神白山神社の大祭で演じられる太鼓打ちのことで、その由来は、天正年間に上杉謙信勢が能登に攻め入った際、苦戦を強いられた村人のひとりが一計を案じ、鬼の面や木の皮に目・鼻をつけ、妖気漂う姿で太鼓を打ち鳴らし、夜襲をかけて敵を追い払ったことであると伝えられています。中央に大太鼓を置き、「おきな」「夜叉」「幽霊」などの奇怪な面をつけた男たちが、海藻で作った頭髪を振り乱しながら入れ代わり立ち代わり気合いの入った掛け声とともに太鼓を打ち鳴らします。カシの木のバチからは、ドーンと腹に響く打音が生まれ、初めはゆっくりと、次にやや早く、最後に最も早く打ち切る三段階を何度も繰り返し、一心不乱に太鼓を叩く追真の演舞が続きます。最近では、観光目的に於て、祭りの時期以外にも浜辺の特設舞台などで演じられるようになりました。

十三

向田の火祭り



「能登島の向田。高さ30メートル、重さ10トンものたいまつが夏の夜空をこうこうと赤く染めます。豊作の祈りがたいまつに届く頃、大きくうねって炎が地上に倒れ、歓声が祭りをいっそう盛り上げます。」

かいせつ

毎年7月31日に行なわれる能登島町向田の伊夜比咩神社の火祭りは、夏の薄暮が迫るころ、神社境内に待機していた7基の奉灯に火が灯され、それを合図に鉦、太鼓、囃子の音が賑かに湧きあがり、男衆は拝殿から出た神輿や奉燈を担ぎ500mほど離れた広場まで練り歩きます。そこには、前日から立てられた高さ30mもの大松明が待ちっており、そのまわりを数百本の松明を打ち振りながら駆け回り、火の粉、火の輪が夜空を明るく照らします。やがて「かかれ」の声を合図に、いっせいに大松明めがけて松明を投げつけると、大松明は巨大な火柱となり、炎を天に突き上げます。夜空も焦がすような壮観な眺めと、男衆の興奮した声で祭りはクライマックスを迎えます。火の粉が散乱し、大松明が音をたてて倒れると、その方角で豊作、豊漁が占われます。



十四 夜明けの海へ漁に出る漁船の音



「能登の朝は早くから沖へ出る漁船で賑わいます。夏の日差しに焼けた肌。力強く網を引く男たち。日本海の幸が目の前で踊ります。」



かいせつ



能登半島のほぼ中央に位置する七尾市は、古代より能登の玄関口として繁栄してきました。七尾市の東、観音崎から富山県氷見市に至る約30kmの海岸の総称を灘浦海岸と言い、このあたりは、定置網漁の先進地として有名です。定置網漁とは、岸から魚を誘導する垣場を張って、沖の身網に入ったところを捕る漁法で、古くよりこの地で行なわれていたとの記録があります。海底が深く入り組んだ絶好の天然漁港であることや能登半島が季節風をさえぎることが灘浦において定置網漁を発展させた理由でした。現在は、定置網漁の中でも明治41年(1908年)頃にその形態が完成した大敷網と呼ばれる大型定置網漁が盛んで、漁獲量も全国トップクラスです。灘浦沖には秋から冬にかけてブリが回遊し、その漁に港は大変な賑わいをみせます。能登では冷たい北東の風が吹き、雷が鳴ることを「鱒起こし」と呼び、人々は鱒起こしでブリの到来を知ります。ブリ漁が始まると、漁師たちの意気もあがり、夜明け前から出港する漁船の音すら活気づいて聞こえます。

十七

あえのこと



「能登の神様は、素朴な生活の中に生きています。冬の訪れを聞く頃になると、奥能登では、一年の収穫を感謝し、夫婦の神様を家に迎えて手厚くもてなします。『あえのこと』は、今も生活の一部として伝えられています。さて、今年のごちそうは何でしょう。」

かいせつ

能登は祭の国・信仰の国です。さまざまな祭礼や宗教行事が各地に息づく中でも異彩を放っているのが、能登北部の珠洲市、輪島市、鳳至郡に伝わる「あえのこと」です。あえのこの「あえ」とは饗応（酒食事でもてなす）、「こと」は祭事を意味する収穫祭の一種です。毎年12月5日になると、農家の主人が苗代田に出かけて、田の神を座敷に迎え入れ、甘酒をすすめます。それから風呂に案内し、ご馳走の膳をすすめながら目に見えない神様をまるで実在するかのように接待します。膳にのせたご馳走は2人前で、必ず二股大根とオザシ（焼き魚）、大きな箸が用意されます。田の神は稲穂で目を突き目が不自由とされており、主人はご馳走の内容を大声で説明します。その後、神様はその家に滞在し、2月9日に再び雑煮餅で接待され戸口まで送り出されます。目に見えない神様に家人が語りかける様はどこかユーモラスで、古来より伝わる稲作社会の基盤をかいまみることができます。



※本CDの「あえのこと」は珠洲市にて収録したものです。

十八

日本海の波の音 間垣が奏でる風の音



「冬になると、海からの風が、能登外浦の海岸を吹き抜けます。生活の知恵から生まれた間垣…。冬の季節風や波しぶきから、暮らしを護ります。厳しくも心優しい能登の冬が始まります。」



かいせつ



輪島市町野町曾々木一帯の海岸は、窓岩に代表される奇岩が豪快な海岸美をつくる景勝地です。国の名勝および天然記念物でもあり、曾々木を語らずして奥能登の美は語れないと言われるほどの景観には自然の妙が凝縮されています。特に、厳冬期に波が岩礁に繰り返したたきつけられて白い泡状となり宙を舞う「波の花」の美しさは感動的ですからあります。打ちよせる大波が、曾々木海岸をつくり、遥か遠くからきこえる海鳴り、暴れ狂う大波の音は冬の日本海そのものです。また、外浦海岸一帯では、海から吹く強い季節風を防ぐために生まれた垣根の一種「間垣」が見られます。間垣の材料は自生する真竹で、葉をつけたまま使用し、幾重にも重ねます。日本海を眼前に暮らす人々の生活の知恵であり、吹き付ける強風で枝や葉がぶつかり合う乾いた音や、間垣を吹き抜ける風の音もひととき甲高く響きわたります。

十九

片野の鴨池のガン・カモ



「加賀市、片野の鴨池。多くのカモやガンたちがここで冬を過ごします。水鳥の餌付けなどいっさい行っておらず、ここでは、鳥たちの自然の営みをそのまま見ることができます。」

かいせつ

片野の鴨池は、加賀市の片野海岸より東に1kmほど入った丘陵地にあります。周囲を松林や雑木林に囲まれた広さ1.5㊦の池は秋の稲刈り後には、隣接する湿地にも水が張られ5.5㊦の水域となります。池は昔から水鳥たちの格好の越冬場所であり、平成5年(1993年)には、水鳥の生息地として国際的に重要な湿地を保全するラムサール条約に登録されたことで、国際的な注目を集めています。鳥の観察に適しているのは秋から冬で、池を一望できる観察館から鳥たちを間近に観察できます。9月中旬になるとコガモやヒドリガモなどがシベリアから飛来します。10月中旬にはほとんどのガンやカモが勢揃いし、羽を休める鳥たちの声が池に広がります。最盛期の11月下旬～2月下旬には6千羽を超えるマガモをはじめ、天然記念物のマガンやヒシクイが羽を休め、それらを狙うオジロワシやオオタカなどの猛禽類もみられます。3月下旬にガンやカモが北へ帰ったあとも多くの鳥が鴨池周辺を棲み家とし、1年を通じて野鳥の楽園となっています。



二十 近江町市場の喧騒



「年の暮れ、金沢の台所『近江町市場』は活気にあふれます。武蔵ヶ辻交差点の一角に、180軒あまりの店がひしめくこの市場では、金沢ことばが、あちらこちらに飛び交います。もうすぐ新しい年が始まります。」

かいせつ



近江町市場は土地の人が親しみをこめて「おおみちょう」と呼ぶ金沢市民の台所です。天正8年(1580年)頃よりはじまった朝市がその前身と言われ、その後、享保6年(1721年)に各地の市場が集められ現在の骨格ができあがりました。その名称は、近江商人が手広く商いを行なっていたことに関連しているようです。現在、市場には180あまりの店が軒を並べます。その魅力は何といても新鮮な素材にあり、豊富な海の幸・山の幸から、風土が育んだ郷土の味まであふれるように並べられています。また、日用雑貨を取り扱う店や飲食店もあり、藩政時代以来一貫して庶民の台所を支えてきたパワーは、今も健在です。今日もあちこちで、「買わんかいね」「もっと安してま」と方言によるやりとりが繰り返され、特に夕方の店じまい時や、年末には活気はますます。最近では、市民だけではなく、観光客の姿も多く見られるようになりました。

■ふるさとの音選定委員会

- 金沢大学理学部教授 矢島 孝昭
- 金沢工業大学助教授 土田 義郎
- 北國新聞社参与兼論説委員 米田 満
- NHK金沢放送局放送部副部長（現）NHK編成局計画主管 下川 雅也
- 石川県立歴史博物館学芸専門員 村田 裕子

■平成10年3月発行

■石川県環境安全部環境政策課 TEL (076) 223-9167
製作 (株)日本エージェンシー